

---

**ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穩なる世界！～**

ころに～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギまでクロニクル！〜いざいけ！平穏なる世界！〜

### 【Nコード】

N9696Y

### 【作者名】

ころこ

### 【あらすじ】

神様方の温情によりテンプレ通りの転生を果たした転生者Aが、ネギまの世界を出来るだけ平和にしようと仲間と共に世界を駆け回る！そんな感じの話です！なお、この作品にはTS等の要素が含まれております。閲覧の際にはそれらにお気を付け下さいませ。

## 第1話 新たなる旅立ち！神様は魚介類！？

Side:???

視界を白が染め上げる。

どこまでも突き抜ける白。

まるで底の無い白色の奈落へ落ちていくようだ。

落ちているのか、浮いているのか解らない。

上下、左右の感覚も無い。

己が今何処を向いているのかも理解出来ない。

そんな空間に”私”の意識は浮いていた。

「で、転生して貰うぞい」

「展開はええな、お魚さん!？」

鯛が泳いでいた。

目の前に鯛が居たのだ。

そりゃあもう赤い鯛が居たのだ。

祝い事の席ならば皆が拍手喝采するであろう程の見事な赤。

それほどの色に引き締まった身を染めた、鯛が居たのだ。

「刺身……!」

「調理方法考え始めた!？」

「いや、ワイルドに焼き魚も良い!」

「やめたげてよお!」

鯛は白い空間でピチピチと跳ねながら叫んだ。

はて、と首を傾げる。

今更だが、鯛とは喋る生物だっただろうか。

答えは否だ。

つまり目の前の鯛は、鯛ではないのだ。  
そう。言うなれば、

「刺身 or 焼き魚用宇宙人……！」

「調理するところから放れないかね!？」

とまあ、冗談はさておき。

「テンプレですね、解ります！」

「身も蓋もないのう!？」

カツと目を見開いて叫ぶと鯛も絶叫。

ノリの良い鯛様である。

成程。大体の経緯は理解出来た。

「貴方が神か」

「儂が神です」

やっぱり鯛は神様だった。

すごいなーかっこいいなーとか言っていると鯛様が仰け反った。  
胸を張っているつもりらしい。

「それで、何時の間に私は死んだのでしょうか」

「いやついさっきテクノ」

「( )。( )。アーアーきこえない」

「……冗談じゃよ？」

冗談だったらしい。

流石神様だ。ユーモアに富んでいる。

「そんな事より転生じゃ！」

「オーケイ神様、成仏したいんだが駄目かい!?」

「ええ!?いきなり投げ出した!?」

「諦めたらそこで成仏だよ……?」

「なに悟った顔で逝こうとしてるの安西先生!?消滅しちゃらめえええええええ!!!」

鯛様の尻尾でぺちぺち叩かれた。

くそっ、あまりの愛らしさに成仏を忘れてしまつとは、

「不覚……」

「ぜえ、ぜえ……は、話聞こうか、君い!?」

仕方ない。鯛様もどうやら必死の様だし、話を聞こうじゃないか。というわけで、自分が今どの様な体勢なのかも解らないが、胸を張ってみる。

気分はソファアに座って寛ぐマフィアの首領である。

「なんか偉そうな態度になってる気がするぞい……魂だけじゃから体勢解らんけどな」

「気にせず先に行きましょう、鯛様」

「鯛様つて何!?儂の姿確かに鯛だけどさあ！」

「いいから説明だ！」

カツと目を見開いて某バスケット漫画のテーピング推し選手みたいな顔になりつつ吼える。

鯛様もその勢いに押されたのか、むむむと唸ってから頷きを1つ。

「君にはとある世界へ転生して、これを集めて貰いたい」

「……黒い玉？」

「うむ、これはのう。儂らの力の結晶みたいなものじゃ」

「鯛様の力の結晶ですか。海産物パワー……！」

「儂、見た目鯛でも神様なんじゃがなあ……」

うーむ、と鯛様がどこから取り出した”黒い玉”を観察する。

なんとというか、”闇のオーブ”とかいう名前が付いていそうな玉だ。

オーラからして既に禍々しい。

「鯛様、まさか邪し」

「そおい！」

「ほぼお！？」

サマーソルト尻尾が華麗に炸裂。

私は宙を舞う事となった。

いや、上下感覚も無いから気がしたただけだが。

「人間には邪悪に見えるが、歴とした神様パワーじゃ」

「そーなのかー」

「これを、君には転生した世界で探してきて貰いたい」

「ほうほう。クエストみたいなものですか。……報酬は？」

「集めまくと生き返る事が出来る」

「な、なんだつてエ

ッ！？」

某MMRの様な陰影の濃い顔で叫ぶ。

魂だけなのそんな気がするだけだが。

「ふふふ、まあ、”君が死ななかった場合”の世界へ意識を飛ばすだけじゃがな」

流石に死んだ事を無かった事にするのは無理じゃ、と言う鯛様。

「しかし、転生ってそんな凄いチャンスまであったんですか」

「いやあ、君達のような若い身空で死んだものだけじゃぞ？」

あと性格破綻者とかもお断りしておる、とは鯛様談。

実際そんなが送り込まれたら”黒い玉”集めどころじゃないだろう。

「つまり私は選ばれし者……！」

「殆どの若い身空で死んだ連中に各神様が聞いておるがの……！」

「Oh……」

当選確率100%という事実には白目になるが、鯛様は特に気にせず続け、

「で、”黒い玉”が多いのは、この辺の創作世界じゃな」

鯛様が尻尾を振ると、私の正面に1枚のウィンドウが開いた。

選択可能な世界

- ・魔法先生ネギま！
- ・魔法少女リリカルなのは
- ・とある魔術の禁書目録
- ・TYPE-MOON系

「見事に魔法系ですな！」

「魔法系の世界は微妙に構築時にエネルギー食うしのお」

「というかアニメとかになってるヤツばっかですね」

「お主が原作を知ってるのを選んだんじゃ。良い心遣いであろう?」  
「なんで知ってるんですか」  
「覗いたんじゃ」  
「先生！プライバシーの侵害です！」  
「この世界では儂がルールじゃ」  
「くそっ、なんてこった！神も仏も居やしねえ！」  
「儂が神です」  
「お前だったのか……」

阿呆なやり取りをしている間にも、次々とウィンドウが展開されていく。

内容は各世界の説明や、転生者の数。

他にはステータス面について、以下の様な説明があった。

#### 特殊能力の付与

・転生者のお決まりで、特殊能力を貰う事が出来る。世界を消し飛ばせる様なのは駄目。

#### 成長率の選択

・成長率『高』：大器晩成。鍛えれば鍛える程強くなれる。でも最初は弱い。

・成長率『中』：転生直後からそこそこの強さ。でも成長限界が決まっている。

・成長率『低』：最初から最強レベル。だけど鍛えても殆ど強くない。

強いというのは、ただ体が強いのではなく頭の良さ等も表しているらしい。

なんだかRPG用のキャラクターを作成している様な気分である。ふうむ、成長率については、やはり安定してそうな『高』か『低』



を選ぶべきか。

「じゃあ、まずは世界は何処にするかの？」

「ネギまで！」

「即決!？」

「後の候補だったリリカルは世界広過ぎだし！」

「他の2つは？」

「また死にたくないでゴザル！」

”ネギま世界”、”リリカル世界”は厄介ごとに関わらない限り、そこそこ安全な世界だ。

だが、”とある魔術世界”と”型月世界”は違う。

戦争が起きたり、実験台にされたり、吸血鬼がうるついでたり。

選択肢を間違えれば即デッドエンドな結末が待っている確率が高いのだ。

そんな不幸を回避出来る連中が此処に来るとも思えない。

よって、その世界達よりは安全そうな2つを選択。

更にそこから世界がそこまで広くない方を選んだ訳だ。

「死んでもそんなに損傷が酷くなければ再生させてやるがのう」

「なにその怪人っぽい不死身さ怖い」

「君は改造人間になるのじゃ……！」

「変身可!？」

「特殊能力にいかかのう」

「いらぬう！」

勝手に変なもんをつけられては堪ったものではない。

次へさっさと進むべきだろう。

「次は成長率じゃ」

「『中』で」  
「えっ」  
「『中』でお願いします」  
「えっ」  
「『中』でお頼み申す」  
「なん……じゃと……」

鯛様の顔に某スタイリッシュ死神漫画の如き陰影が付く。

「いや、よくよく考えたら、”黒い玉”集めるだけなら、そこなりの能力があれば……」  
「ええ！？良いのか！？最初から最強！とか成長限界無しとか、男の浪漫じゃぞ！？」  
「そんな事より”最初にそれなりの強さ”だ！」  
「そこ！？」  
「この強ささえあれば、病死なんてする事もないだろうし、幼年期は安泰！」  
「なんとという安全策！？」  
「しかも成長限界があるとはいえ、成長する喜びが感じられるお得感……！」  
「お、得……？」

ちよつと待て、と鯛様が背びれを向ける。  
宙に揺れる尻尾がなんともチャームिंगだった。

Side: 鯛様

予想外である。

まさか成長率『中』を選ぶ剛の者が存在するとは。

……ぶつちゃけアレ、他2つを際立たせる為の選択肢なんじゃがのう……。

正直に言ってしまうと、殆ど細かい設定なんて行っていない。だって、選ばれた事ないんだもん。

……皆、『高』か『低』しか選ばないしのう。

どうするか、今更細かい設定なんぞ出来ないし。

ああもう適当で良いか。

この転生者も悪いヤツじゃない。

ちよつとぐらい力を与えても悪用はしないだろう。

ウィンドウを目の前に表示し、設定を開始。

完了。

この間、僅か3秒。

鯛様の豪快さが遺憾なく発揮された瞬間であった。

S i d e : ? ? ? ? 転生者A

「じゃあ次は特殊能力じゃ。何が欲しい？」

「いらぬう！」

「ええ!?!」

「転生はよ」

「ちよつと待とうかのう!？」

何故引き留めるのだ、鯛様。

「と、特殊能力じゃぞ!? 男の浪漫じゃぞ!？」

「あの世界行けば、幾らでも特殊能力手に入るよ!」

「”王の財宝”とか”バスターマシン”とかはいらぬのか？」

「なにそれ殺傷能力有り過ぎ怖い」

「た、例えじゃ、例え。で、何かないのかのう?」

「うーん、じゃあ……成長限界と最初からの強さの度合いを上昇…

…?」

「基盤強化するだけ!？」

「素の能力で圧倒、それもまた浪漫だとは思わぬかね……」

「ハッ!」

鯛様は私の言葉に驚いた様に目を見開き、マジで目から鱗を落とす。

鱗落として大丈夫か魚介類。

なにはともあれ、あと一押しっばいので、心の中で拳を振り上げ、

「ただ1つの肉体で圧倒! そう! まるで某龍玉の如く!」

「少年漫画の王道じゃな……! この儂が間違っておったわ……」

鯛様は解ってくれたようだ。

彼はうんうん、と頷いてから、

「じゃ、リミッター色々外しておくぞい」

「えっ」

「某龍玉みたいなら限界は超えるものじゃろうがあ!？」

成長限界はどうした鯛様。

「良いからZ戦士だ！」

カツと目を見開きながら、某バスケット漫画のテーピング以下略。  
まさか”あの作品”のファンだったのだろうか、この鯛様。  
とりあえずもう駄目っぽいのでさせるがままにした。

「よし、リミッター解除成功じゃ」

「マジでやつちまったよ鯛様……」

「Z戦士故致し方なし……あ、あと原作じゃが別に介入しても構わんからな？」

「ん？」

思わず首を傾げてしまう。

原作ブレイクなんてして、良いんだらうか。

「今からお主が行くのは”ネギま！”という作品を元に構成された世界じゃ。想像の数だけその世界の数は存在しているからの。別に原作から外れても問題ないわい」

「そっぴや世界構築とか……実は凄い神様だったり？」

「妄想の世界具現化は格の低い神様の簡単なお仕事です」

「ソウデスカ」

思わず揃って白目を剥く。

なんか居た堪れなくなつた今日この頃である。

「じゃあ、転生じゃな」

「あれ？まだ容姿とか決定してないですよ？」

「この鯛様が既に決定しておる！安心せよ！」

「鯛様って自分で言った！？安心出来ねえ！？せめてヒント！」

「TSって良いよね！」

「ヒントは良いから結果を言えエ　！」

「ゆっくり原作介入していつてね！」

「この鯛様、最初から原作介入させる気満々じゃねえか！？」

鯛様が愛らしく身を跳ねさせる。

捌いてやるうか。

「よし、ある程度決まったところで”いつてらっしゃい”じゃな  
「え」

瞬間、穴が空いた。

真下の空間、と思われる場所に黒の色が出現したのだ。

その現れ方は唐突で、この身にかかる重力が顕現するのもまた唐突であった。

そして私は落下した。

「サポートセンターは年中無休でくっついてるぞい！安心して頑張るんじゃぞー！」

「サポートセンター！？」

絶叫にも近いツッコミを最後に私の意識は、黒の一色に染め上げられた。

**第1話 新たな旅立ち！神様は魚介類！？（後書き）**

初投稿ですが、よろしければどうぞよろしくお願い致します。

まずは、お決まりの空間より落下系主人公で開幕であります。

## 第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！

Side：転生者A

白の空間から一転、闇が世界を支配した。  
広がる黒。

今度は沈んで行く感覚が身を包むのが、ハッキリと解る。  
まるで深海へ沈み込んで行く様な重み。

だが、それは肉体が持つ重量だ。

その感覚が意識が認識した時、理解した。

肉体が、与えられた。

掌を握る感触が神経を走り、脳へと伝わる。

暗闇の中から、意識が、浮上する。

目覚めは一瞬だった。

「……！」

ごぼり、と口から気泡が漏れる。

何事と思う事も間もなく、状況は理解出来た。

液体の中にいるのだ。

目を見開き、周囲を見渡す。

薄い緑色の液体が全身を覆っている。

視界も同色に染まっていた。

不可思議な事態。

だが、意識は鮮明だ。

これが転生効果というヤツだろうか。

恐慌状態に陥る事もなく、此処がカプセルの様な物の中だと把握  
出来た。



「……………」

成程、と頷きを1つ。  
実験動物系の開始か、これは。  
顔を上げると、潰れた女性の顔が見えた。  
ついでに視線が合った。

……………うわぁ。

なんか超目を輝かせた女性がこつちを見てる。  
のぞき窓と思わしき所に彼女は顔を張り付かせていた。  
元はかなり整っているであろう顔も無残に今は押し潰されている。  
というか、目を血走らせてるし、鼻息荒くて窓白くなってるし。  
こつち見んな。

……………む、裸か!?

今更だが、自分が何も身に纏っていない事に気づいた。  
視線を下ろせば広がるのは大草原。  
Oh……なんというロリボディ。  
身長も、大体の感覚でしかないが1mに届いていないんじゃないかな。  
ろっか。

完全に子どもである。

「あ、う」

声を出そうとしてみるが、ちゃんと発音出来ない。  
ううむ、液体に浸ってるせいだろうか。  
というかのぞき窓に張り付いた女性が怖い。  
こつちが動く度に恍惚とした顔を浮かべるな。

涎を垂らすな。手をワキワキさせるな。  
そんな事やっていると泣くぞ。すぐ泣くぞ。全力で泣くぞ。  
マジ怖いですからのぞき窓に頬擦りしないで下さい。

「……」

うへへ、と声が聞こえてきそうな女性の様子を見つつ、今後の展開を予想する。

判断材料は、危険信号の塊っぽい前方の女性。  
相変わらず金の短髪を揺らしながら、のぞき窓に頬ずりしてる。  
なんか煙出てるけど大丈夫なんだろうか。

……まあ、ネギま世界の住人だし大丈夫だろう。

多分ギャグ要員だろうし。

……現状は、恐らく研究員が実験動物が目覚めたのを見つけたって  
トコロか。

しかし、実験動物が目覚めただけにしては、女性の奇妙過ぎる様  
子が気になる。

私、実は結構重要な研究対象なんだろうか。

……とりあえず。

重要なのは、今の状況から脱出出来るか、否か。

『出来るぞい？』  
「む」

鯛様の声？

『此処じゃよ、此処』

「何故、肩に……」

右肩に視線を向けると、半透明になった鯛様が張り付いていた。彼は右の胸鰭をヨツ、とでも言う様に上げる。

『サポートも神様の仕事じゃて。まあ、僕は分身みたいなもんじゃが』

おお、そこまでしてくれるのか。

神様って親切だなあ。

罵倒していたのがちよつと悪くなる。

「だがロリボディに、転生させたのは許されざるよ」

『ナイスチヨイスじゃろ？』

キラツ と擬音が付きそうなウィンクを放つ鯛様。

やべえ殴りてえ。

『何はともあれ、脱出したいなら、前方の扉を殴ってみるが良いぞ』

『？』

「ん？」

ふむり。鯛様はどうやら脱出の手引きをしてくれるつもりらしい。

「状況の説明は、してくれない？」

『僕もお主から離れられんし、起きたばかりで現状を理解はしとらんよ』

成程。別段良い方向へ導いてくれるという訳ではないらしい。  
やりたい事を成す方法を教えてくれるだけという事か。

……とりあえず……。

のぞき窓が付いている部分へ視線を向ける。

その周りを見てみると、若干の窪みが枠を作っていた。

どうやらのぞき窓が付いている部分が、このカプセルの扉らしい。  
なれば、鯛様の言う通り、

……殴る！

拳を引いてから、若干液体の中で体を捻り、回す様にして、

「疾ッ！」

放つ。

S i d e : 研究員 A

瞬間、偉大なるプロジェクトに参加する研究員 A      プリオラは  
狂喜していた。

何故かと言えば、その原因は目の前にある。

真白いカプセルに備え付けられたのぞき窓。

その中で、満たされた液体に浮かぶ様になっていた少女が、動いた。

”研究対象”兼”保護対象”である少女が”目覚めた”のだ。

計器の前で徐々に小さくなっていく心拍数を見た時、今回も駄目かと思った。

今までの努力は全て無駄だったのかと落胆した。だが、心拍数が0になった瞬間の事だ。

『

計器の電源が落ちた。

魔力によってサポートもしていた筈のそれが、唐突に反応を無くしたのだ。

正直こちらの心臓が止まったかと思った。

生命維持装置まで電源が落ちていたら、という考えが脳裏を過ぎったからだ。

慌ててカプセルまで走り、のぞき窓の中へ視線を移し、

「

……

こちらを見ている幼い少女と目があつた。

橙色の長髪を液体の中に泳がせる少女の視線は凛々しく、ハッキリとしていた。

間違いない。

生きてる。

「~~~~っ!」

感動の余り、声を上げてしまった。

何事かと周りの研究員が視線を集めてくる。

だが、気にはならない。

「やった……！やったのよ……！」

もう嬉し過ぎてのぞき窓越しに頬擦りしてしまう程だ。

ああもう目覚めたなら目覚めたと言ってくれば良いのに。

人を心臓止まらせる程驚かせてから、幸せプレゼントとか御茶目さん！

うへへ、と涎が流れるがスルー。

早く外に出してあげたい。

そしてこの手で抱きしめて、直に頬擦りだ。

そりゃあもう実の娘の様に可愛がってあげるんだから！

「でもその前に各種チェックね！ああでも離れたくない！」

カプセルにこのまま張り付いて一晩を過ごしたい気分だ。

徹夜続きのせいで寝不足だが、それすら苦にならない。

よし決めた！今日はこのまま一晩中一緒に居てあげ、

「ん？」

何かカプセル内で動きがあった。

少女が体を捻っていたからだ。

運動がしたいのだろうか。

……ふふふ、安心しなさい！ここから出たらいっぱい運動させて。

そんな風に未来設計が脳裏を過ぎった瞬間だった。

のぞき窓内で、少女の姿がブレた。

「およ?」

愛しの少女の姿が遠ざかっていく。

何故か。

簡単だ。

のぞき窓の付いている扉が吹っ飛んだのだ。

ついでにその扉に張り付いてた自分も吹っ飛んだのだ。

実に解りやすい。

しかし、

……ああ、拳を突き出す姿もとってもプリティよ!

次の瞬間、ぶぎゅっと声を上げてしまった。

唐突な衝撃が脳を揺さぶる。

勢い良く壁に叩きつけられた彼女は、しかし、最後の根性で、

……ナイス正拳突き!

親指を立てたジェスチャー。

ありつたけの賞賛を少女へ送りつつ、壁と扉に挟まれたまま気を失った。

Side: 転生者 A

目の前で、べちゃっと音を立てて女性が床に落ちる。

なんか幸せな表情で落ちたし、多分大丈夫だろう。

「……凄いパワー」

『じゃろ？成長率』中』は伊達じゃないぞい』

右肩の上で、嬉しそうに語る鯛様。

ていうか、本当に『中』なんだろうか。

なんか凄い勢いでカプセル破壊されたんだが。

『高』だったら今のでカプセルなんぞ跡形も残らんわい』

「なにそれ怖い」

『中』を選んで、本当に良かったと思う。

さて、と液体の流れた出たカプセルから外へ足を踏み出す。

液体が無くなった分、余計に身体が重く感じる。

だが同時にそれは、生きてる感覚も与えてくれた。

……ああ、生き返ったあ。

んーっと体を伸ばしてから、首を左右へ傾ける。

骨が鳴る快音。

続けて周囲を見渡せば、啞然とする白衣を着込んだ女性が数人。

「……」

『……戦闘員では、無いようじゃのう』

視線を向けると、肩を跳ね上げる女性達。

表情から見るに、怯えているのだろう。

「ん」



一息。

ただそれだけの行為。

だというのに、女性達は部屋の隅まで猛ダツシュで避難した。え、何その怪獣から逃げる様な全速力。

「……………」

『フハハハ！怯えろお！竦めえ！研究成果を活かせぬまま死んでゆけえ！』

しかしこの鯛様ノリノリである。

とりあえず鯛様の腹を叩いて、

「説明はよ」

『お？説明？』

「現状を、把握したい」

『なんかお主口調が平淡になってるような気がするんじゃが…………』

なんか話すのが難しいのだ、このボディ。

顔が硬いというか、なんというか。

『まあええわい。まあ、正直儂にも解らん。儂、お主の容姿を設定

しただけじゃし』

「容姿…………？」

『うむ。そこの鏡を見てみるが良いぞい』

鯛様が指差す先には、全身を映すタイプの鏡が1枚設置されていた。壁に掛けられたその鏡には、1人の少女が映っている。

まあ、私の事だ。

少女なのは諦めた。

鯛様が勝手に選んじやったし。

生き返れたのには変わりないんだから、許容範囲である。

問題は、

「アス、ナ……」

チビ明日菜だ。

完全にチビ明日菜である。

原作でもチヨコチヨコ出ていた我らがヒロイン明日菜の幼年期である。

しかも昔の無表情モード。

試しに笑ってみようとしたが、表情筋が死んでいるかの様に動いてくれなかった。

まさに鉄壁フェイスである。

……Oh……。

なんとという鯛様でしょう。

原作キャラの中でも超重要キャラ似ボディにしてくれるとは。

これには匠 もとい、私も内心苦笑い。

というか研究対象にされてたとか、正直嫌な予感しかしない。

『ううむ。明日菜似と設定したは良いが、こんな状況になるとは』

もう少し細かな設定しておくべきじゃったのう、と鯛様は顎を齧でなぞる。

「……」

『むねむ』



振り向いてみれば、肩程まで緑色の髪を伸ばした女性が居た。その姿は灰色のスーツで、白衣は着ていない。

「え、えっと、寒いでしょう?」

女性は、こちらの肩に自らの白衣をかけてくれたのだ。

彼女は強張った表情を浮かべつつも、こちらを心配してくれている様子であった。

……なんと。

優しい女性だ。

私が男のままであったならば即座に惚れ込んでいただろう。現在は同性なのが悔やまれる。

「……ありがとう」

「えっ!? あ、は、はい……」

白衣で身を包み、再度周囲を見渡す。

様々な機器が部屋に所狭しと配置されている。

そして、部屋の最奥には先程破壊してしまった白いカプセル。所々から煙を上げ、液体を噴き出している。

部屋の広さは、一辺が7m以上はあると思われる正方形。

高さは4m程か。

部屋の中に存在する研究員と思わしき女性は4人。

1人は緑色の髪を肩まで伸ばしたスーツ姿の優しき女性。

もう2人は部屋の隅でガタガタ震えている。

金髪のデコ見せヘアと前髪で目を隠した黒髪の2人組だ。

ちなみに2人も灰色のスーツに白衣といった出で立ちをしていた。

緑髪の女性もそうだし、此処の制服だったりするのだろうか。  
ちなみに最後の1人は扉の下敷きになっている金髪だ。

「あの人」

「え？ああ、か、彼女？多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だし」

亜人？

という事は此処は魔法世界か。

良く見てみれば、緑髪の女性も額に1対の白い角が生えている。

「……」

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら？」

「何も」

困った様に口元に手を当てつつ、女性はこちらを見てくる。

ぶっきらぼうな口調になってしまつのはなんとかならないだろうか、マイボディ。

『クールな女子って良いもんじゃよね！』

「神様エ……」

「？」

右肩でピチピチ跳ねる鯛様はスルー！。

とりあえず女性に頭を下げて、白衣のボタンを留め、回れ右。  
視線の先で目を回している金髪を救う為に歩き出した。

Side：緑髪の亜人研究員

何時もは静かで退屈な研究室。  
その変化は本当に唐突だった。

「へ？」

私はその瞬間、間抜けな顔をしていたと思う。

目の前で、ちよつと特殊な趣味を持つ女性が宙を舞っていたのだ。  
しかも、頑丈さが売りであった筈のカプセルの扉と共に。

……あつれー？あれって”ラカンが殴つても大丈夫！”っていうのが売り文句じゃ……。

視線を件のカプセルへと向ける。

水音を響く。

音は、幼い少女の歩みによって発生しているものだった。

濡れて重くなった橙色の長髪を揺らしながら、彼女は足を進める。  
カプセルから軽い動きで出て来た彼女は周囲を少し見回すと、

「ん……」

自分の頭上で手を組み、全身ごと天に向かって伸ばし始めた。  
更に身体の調子を確かめるかの様に各部を肩を回し、手を開閉する。

そつする事、数分。

研究室に静寂が訪れる。

怖い。

目覚める筈がない欠陥品。

それが、彼女の呼び名だ。

私達は暇だから、特にやる事もない部署に飛ばされただけだった筈。

書類の山から解放された、平和で優雅な日々が送れる筈だったのだ。

だが、その”筈”はいとも簡単に打ち砕かれた。

欠陥品と呼ばれた少女は今、目を覚まして、目の前に存在している。

その能力は一国を滅ぼしうるといふ伝説の力を秘めた少女が、だ。

「  
」

不意に少女の視線が、こちらに向いた。

「ひっ」

「ひいひいひい！」

「ちよっ、おまっ！」

最初の私の怯えを切っ掛けに、他の研究員が全力で壁際までダッシュしていった。

おのれ、私を置いていくとは後で酷いぞ貴様ら。

約1名逃げ遅れが居たが、彼女も近くの壁に張り付いて、移動を開始。

どうやら恐怖の権化である少女の後ろを通って扉まで辿り着くつもりらしい。

「アス、ナ……」

「!?!」

この子、オリジナルの名前を!?!

まさかオリジナルの記憶まで持っているというのか。  
となると色々過去に酷い目にあっていたという話だし、

……生き残れる気がしない!?

今までの恨み!とばかりに虐殺される未来が脳裏を過ぎる。

すいません、母様、父様、娘は親孝行があまり出来ない娘でした。  
ほろり、と頬を一筋の涙が伝う。

歪んだ視界の端では、隙について脱出を試みた同僚が少女に服を  
要求されていた。

背を向けている筈なのになんで気づけるんだ、あの幼女。

殺気に思わず涙目になりながら、扉を乱暴に開けて全速で退出す  
る同僚。

というか、あの幼女マジで怖い。

目が完全に殺し屋のそれである。

幼いながらも鋭い目つき、一切変化のない表情。

その上で滲み出るあの威圧感。

「……」

「ハッ!？」

威圧感が薄らいだ、と思えば少女の視線の向く方向は、研究所の  
出口。

同僚が今さつき服を探しに飛び出した、ある意味楽園への入り口  
だ。

……まずい!数秒しか経っていないのに怒ってらっしやる!?

このままでは八つ当たりで殺られる!?

そう思うと行動は速かった。



そう。逃げれないなら、立ち向かうのみ。  
怯えに震える足をなんとか動かしながら、1歩、2歩。  
なんとか少女へと近づく。  
そして、己の白衣を脱ぎ、彼女にかける。

「？」

少女の意識が向けられる。

氷に様に冷たい視線。

思わず目を背けたくなるが、全力でその欲求を抑え、微笑む。  
ぎこちなくなっただが、お願いだから看破しないで下さい。

「……ありがとう」

「えっ!？」

思わぬお礼に目が点になる。

え、もしかしてこの子、意外に、普通の子？

外はクールで中身はほっこりって感じなの？

「あ、は、はい……」

だが油断は禁物だ。

迂闊に砕けた態度をとったらカプセルを破壊した攻撃が飛んできかねない。

ここは慎重に、礼を失さない様に頷く。

声が強張るのは仕方ないだろう。

だって怖いんだもの。

「あの人」

「え?ああ、か、彼女?多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だ

し」

カプセルの扉に押し潰された金髪を見る。

時折頭に生えた角が動いてるし、大丈夫だろう。

亜人という種族は総じて頑丈なのだ。

私も幼い頃からこの頑丈な身体には何度も助けられたものだ。

……うおっ、殺気!?

寒気を感じて少女に視線を戻すと、彼女はこちらをジッと見ていた。

あ、死んだ?なんか知らない内にバッドエンドフラグ立てちゃった?

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら?」

「何も」

何でもないならその殺気を向けるのを止めて!

「神様……」

「え?」

ぼつりと呟くと彼女は背を向けて、倒れ伏す金髪へと向かっていった。

なんか片手でとんでもなく重い筈の扉をぶん投げたりしてたが、気にしたら負けだ。

しかし、今の呟きは一体。

神様、という単語が、何を意味しているのか。

……どういう事なの。もしか、神様への恨み言……!?

神様は、なんでこんな世界に私を生まれ落ちさせたの？

死ぬ方がマシなくらい辛い思いをするなら生まれられない方が良かった！

こんなにも苦しいなら、こんなにも悲しいなら……世界などいらぬう！

ズビズバギヤー。

……スプラッター……！

脳裏では血塗れの少女が狂気に満ちた高笑いを上げつつ、自分を虐殺中である。

……絶対に彼女の機嫌を損ねてはいけない！

私は心の中で強く決意するのであった。

Side：転生者 A

数時間後。

何故か私は研究室らしき場所とは別室に居た。

「わぁ、服似合ってるわよー」

「ん」

そして着せ替え人形にされていた。

目の前に居るのは金の短髪をいやんいやんと揺らす女性  
オリダ。

先程、吹っ飛ばしてしまつた彼女を助けたのだが、

……まさか自己紹介された上、お詫びに服を用意する、とか言われるとは。

ちなみに叫んで部屋を飛び出して行つた研究員はスク水を持つてきた。

即座に近くにあつたランプで焼却しておいたが。

『似合つてるのう。というか恥じらつたりせんのか？』

十分恥ずかしいツスよ、鯛様。

ただどうあがいても表情にそれが出ないだけだ。

何この鉄皮面。

ていうか、鯛様他の人には見えてないんスね。

さつき皆の反応を見て漸く気づきましたよ。

……しかし、あんまり”女”になつたつていう実感がないなあ。

元々それが自然であつたかの様な感覚。

なれば、現状を受け入れる事も簡単だ。

……うーむ。確かに”私”は男だつた筈なんだが。

記憶を探ってみれば、確かに過去の己は男だつた。

常にマツシブなボディを目指して肉体を苛め抜く日々を送る益荒男。

そんなナイスガイが、過去の己。

今やその片鱗すら消し飛んだボディではあるが。

……む。新しい服か。

プリオラがハンガーラックから新しい服を取り出し始める。  
勿論、満面の笑みを浮かべながら。

というか、この部屋、なんか凄い少女趣味な服多くないか？  
しかも全部私のロリボディにピッタリなサイズである。  
明らかに元々用意してあっただろ、コレ。

「やっぱりスカートが似合うわね！うん！」

彼女は白衣の裾を派手に揺らしながら、頬に両手を当ててくねくね。

恍惚とした表情が怖い。

……なんで着るのも自然に出来るんだ？

着せられたプリーツスカートの裾を持ちながらヒラヒラと振ってみる。

落ち着かない気分ではあるが、特に嫌という訳でもない。

『むう、肉体への最適化が過剰に行われておるのかもしれないな』

鯛様が不穏な事言いながら、首を傾げる様に身体を捻った。

なんとという可愛らしい動作か。

「後はこの上着を着れば完成ね」

ふとプリオラの声に振り向けば、彼女の手にあるのは民族衣装っぽいもの。

それは、地面まで届きそうな長い裾を持つ、ワンピースの様な服

だった。

ただし、スカート部分は前の方が大きくカットされており、足が見えている。

胸元から二の腕辺りまで模様が入っており、それがアクセントとなっていた。

……って、それ、チビアスナが捕まっていた時に着てた服じゃ。

下にプリーツスカートを履いているという差異はあるが、大体同じだ。

「ふふふー、大戦期の極秘資料を見て、写真の服に合わせて用意したのよ！」

貴女には何の事だか解らないでしょうけどー、と彼女は苦笑する。いや、解りますけど。

というか大戦期の極秘資料を見てって、実は相当偉い人なのか、この人。

「さあー、ドンドン着せちゃいましょうねー」

「……任せる」

「任されたわ！」

輝く瞳が標的（私）をロックオン。

まあ、折角選んでくれてるのだし、悪い気はしない。

ヒヤッハー！と上着を私に着せていくプリオラ。

そういえば他の研究員は何処に行ったのだろうか。

『記憶を持つてるとか、上に報告とか何とか言ってどっか行きおっただぞい？』

「……」

上司に研究対象が目覚めた事を報告、という事だろうか。  
だとすると、早めに脱出した方が良いな。

……プリオラさんには悪いけど、実験動物はマジ勘弁だからな！

服とか色々貰っておいて、薄情だとは思うが命には代えられぬの  
だ。

誰に言われなくてもスタコラサツサだぜ！

「あとはー。あ、ツインテールね！念願のツインテールが出来るわ  
！」

響きのに殺してでも奪い取られそうなツインテールだな。  
しかし、嬉しそうに髪を弄るなあ。

「……ねえ」

「ん？なあに？というか、そっちから話しかけてくれたの始めてね  
！？嬉しいわ！」

「なんで……私に良くしてくれるの？」  
「なんでって……」

んーそうねえ、と彼女は困り顔で頬を掻く。

「私、貴女が起きるのをずっと待ってたのよ」  
「起きるのを？」

「うん。もう2年くらいになるかしらねえ」  
「長い」

「そう。随分長い間待ったわあ……」

プリオラは、溜息を1つ。

「でも今はこうしてお話出来てるし、待った甲斐はあったというもののね!」

「……」

やばい。この人凄く良い人なんじゃ。

ほら、もしかして私の勘違いで、この人達は私を保護してくれてただけ、

「でも暫くしたら、貴方も本国に行かなきゃいけないだろうし……」

淋しいなあ、とはプリオラ談。

それを聞いて、内心は凄く良い笑顔で頷きを1つ。

「うん」

よし、パパン張り切って脱出しちゃうぞー。

本国送りとか嫌な予感しかない。

某アルター使いが『ハンマー!』しか喋れなくなるくらい嫌な予感しかない。

そうと決まればやる事は1つ。

……鯛様、この辺りの地図とか、今年年とか解る?

『む?そのくらいなら本体から情報をダウンロード出来る筈じゃぞい?』

本体って何?あの白い空間の鯛様なの?いっぱいいるの?養殖なの?



それはともかく、ならば問題無し。  
逃走資金と逃亡先の確保は、

……魔法世界なら狩りとかで生活分は確保出来るよね、うん！

楽観的な思考でスルーする事にした。

あんまり考えてるとドツボにはまると思ったからだ。  
人生、要所要所では気楽に行くのが一番だよね！  
強化された身体もあるし、何とかなるさ！

「よーっし、ツインテール完成よ！」

「……ありがとう」

本当に嬉しそうな声。

罪悪感が胸を刺す。

でも悲しいけど、これって実験動物生活から逃亡する為なのよね。

「ねえ」

「ん？なあに？」

「外、出たい」

「あら。もう？でも色々検査が……」

「お願い」

「……ちよつとだけよ？」

ツインテールを翻し、振り向きからの上目遣いコンボ。

こっちはばつぐんだ。

相変わらず無表情だけ。

『元男なのに上目遣いを使いこなすとか、恐ろしい子……！』

白目剥いた鯛様は無視した。

一発でノックダウンされたらしいプリオラに手を引かれて廊下に出る。

そのまま数分歩いて、外へ。

「さあ、ついたわよ。ここがお外。貴方は……初めてよね？」

「……」

凄い。

初めに抱いた感想が、それだった。

チープな言葉でしか表せないが、とにかく、凄い。

白亜の研究所らしきものを背に、私達は広い庭に居た。

庭と言っても仕切りなどがある訳でもない。

その代りに、

「その森、危険な動物は住んでないけど、1人じゃ行っちゃ駄目よ？」

庭を区切る様に、森が広がっていた。

高く背を伸ばした木々が構成する森だ。

草原の様な庭と、森の見事に組み合わせられた風景。

綺麗だった。

自分の居た国では、滅多に見られない光景だ。

同時に、それらは此処が別世界なのだという事を視覚的に教えてくれた。

天然のそれらは、人工的な物を見慣れていたこの胸を震わせてくれる。

……って、そんな事してる場合じゃないよな。

強化された目を凝らすが、奥が見えない。  
結構深い森らしい。

……行ける？

『ふむ。危険な獣も居ない様じゃし 行けると思うぞい』

ならばよし。

「でも遊び道具がないわねー……何か取り寄せようかし」

「プリオラ、さん」

「ん、今、名前で……？えっと、なあ」

「ごめんね」

彼女が『なあに？』と言い終える前に全力ダッシュ開始。

「え」

呆然とした声が背後から響いた。

最初は殴ったりして気絶させようかと思ったが、

……下手に殴って潰れたトマトにしてしまったら嫌だし！

この肉体、スペックがとんでもない。

さっきもプリオラに隠れて鉄製のパイプを握ったら、

……見事に握り潰せたしな。

武術の心得もそんなにない自分では上手く気絶させられるのかも  
解らないし。

……三十六計逃げるに如かず　　ッ！

『それでいいのか主人公』

主人公じゃねーし！

私には脇役がお似合いだし！

というわけで、プリオラ殿、サラバダー！

「　　!?」

後ろから叫び声が聞こえてきて若干胸がチクリとするが、今更止まれない。

そのまま私は森に飛び込み、走る。

振り返る事は、無かった。

## 第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！（後書き）

生誕の地（約数十分）。

感想などがありましたら、ぜひよろしくお願い致します！

以下、主人公設定図

> i36060 — 4514 <

物理殴打系ヒロイン兼主人公

ッ！

### 第3話 指針決定！そして新たな力！？

Side：転生者A

「まさかの爆弾……」

『だが散弾ではなあ！』

全身からシユウウと煙が上がる。

強化ロリボディでなければ即死だった。

……走つてたらいきなり足元が爆発するとかもうね。

魔法世界なのに地雷っぽいのかどうなんだ。

しかも散弾式とか殺す気満々ですぞ。

なんか弾が光ってたからもしかしたら魔法なのかもしれないが。

『しかしまだ数時間も経っていないのに、気の使い方が上手いのう』  
「咄嗟に、鯛様助けてくれた」

鯛様が言った通り、全身に膜を張るイメージを浮かべなければ、

……今頃ミンチより酷えや状態になってたよ！

見れば、自身の身体を薄く金の光が覆っている。

これは、念とかそういうのだろうか。

先程の攻撃を防ぎ切ったのも、この金の光だ。

服にすら傷一つない。

凄いの使える様になっちゃったな、自分。

……数時間前まで普通の生活してた筈なんだけどなあ。

まさかこんな不思議パワーが使用可になるとは。  
現実離れした事実を確認すると同時に、自分が1度は死んだ事を  
思い出す。

「痛ッ」

一瞬、脳裏にチリリと火花が散る。

……何だ？

頭を振ると頭痛は消えた。

いや、それより今は目の前の光だ。

輪郭に身を包むそれは動けばキチンとついてくる。  
若干奇跡に残像を残しているのが、地味に感動だ。

1回くらいなら転生もしてみるもんである。

ちゃんと仕事すれば、生き返れるらしいし。

もしかして凄く貴重な体験をしているのではなかるうか!?

……まあ、死んだからだけだな！

発生条件がリスクー過ぎるのが玉に瑕である。

と、そんな事を考えている場合ではなかった。

体勢を立て直さねば。

「んっ」

防御は鉄壁でも、中身は素人なのだ。

閃光に驚いて思わず転んでしまっても仕方ないだろう。

というわけで、立ち上がり、手を2、3回開閉する。

「うん……問題ない」

『ああもあっさり防御するとは思わなかったが、やるもんじゃのう』  
「鯛様の、おかげ」

鯛様の言葉に感謝の言葉と頷きを返して、再び走り始める。  
否。

その動きは走るといふよりも、跳ぶといった表現が正しいか。  
さっきのような爆弾を警戒して、木の枝と枝をジャンプして渡る  
事にしたのだ。

枝と言っても、太い。

どれくらい太いかと言うと、現在の自分の胴回りよりも太い。  
ちみっこい自分が乗ったところで、折れる心配はないだろう。

……前までだったら絶対やろうとも思わなかったよな！。

つくづく人間離れしたもんである。

『このまま真っ直ぐ木の枝を今のペースで渡り続ければ、数十分で  
森を抜かれるぞい』

「ん。頑張る」

言葉と共に、跳ぶ。

顔を撫でつける風が結構気持ちよかった。

森を脱出し、1日が経った。



朝である。

え？展開が早いって？細けえ事は良いんだよ！

さて、朝までの間、私が何をやっていたかというと、

『あのキノコは食えるのう』

「いただく」

茸採り等、アウトドア生活を楽しんでおりました。

『まあ、行く宛が無いとも言っつがの！』

「気にしない」

此処は研究所らしき場所を覆っていたかなり広大な森を抜け出してから、道なき道を更に数時間走った場所にある渓谷だ。

命からがら罨だらけの森を突破してきた先にこのような場所があったのだ。

左右を見れば頂点が白い雲に覆われた山々が織りなす絶景が広がっていた。

『しかしこれからどうするんじゃ？』

「……目的は決まってる」

座ったままの体勢からキノコを握って立ち上がり、

「後は、今から考える」

『結局行き当りばったりだった！？』

いや、後先考えず飛び出たし。

その結果だし、現状は自業自得だ。

まあ、鯛様が居るから淋しくないし、生活の為に必要な助言まで

してくれる。

あんまり不自由ではないのが現状だ。

『しかし、目的とは？』

肩の上で鯛様が首を傾げる様に身体を捻る。

それに対して私は頷き、

「黒い玉集め」

『うむ。当初の目的を忘れてないのは良い事じゃ』

うんうん、と鯛様も頷きを返してくれる。

それに対して、私は右手の人差し指を立てて言葉を続けた。

「あとは、ネギを、出来るだけ平和に過ごさせる、のだ」  
『……………ん？』

え。何故訳が解らないよ、みたいな顔をするのですか。  
原作介入しても良いよ？って言ったの貴方でしょうに。

『いや、しろとは言ったがの……………何故ネギを平和に生きさせる方向  
なんじゃ？』

「……………可哀想」

だって原作時、数えて10歳ですよ、あの子。

凄まじいまでの天才なのは原作見れば解るが、

……………あの歳で世界を救う為に命賭けたり、人間を止めちゃったりと  
かねえ。

自分の住んでいた国なら、楽しく友人達と遊んでいるであろう年頃だ。

だから、

「ネギが、平和に暮らす世界があっても、良い」  
「……………」

何故ポカンと口を開けてるのですか、鯛様。

『めつずらしいタイプじゃのうお主……………』

「……………」

『ネギ坊主を平和に暮らさせる』のが願いなんぞ、初めて聞いたぞい？』

「そついう転生者が居ても良い……………」

自由とはそついう事だ、と心持ちハードボイルドな感じで笑みを浮かべる。

浮かべたつもりだけで、表情は全く動かなかったが。

おのれ鉄壁フェイス。

『まあ、ぶつちゃけ本人に希望を聞いた訳でもない押し付けじゃが』  
『の』

「ぐく」

ぐぬぬ……………そりゃ解ってるのですが。

”漫画の世界”に来たって言っても、そこで生きてる人達は本物だ。

自分がやろうとしている事は、他人の人生を好き勝手に左右する様な事なんだから、

良い事でないのは確かなのだけでも……………。

……子どもが痛い目にあうのが解ってるのに、放ってはおけないよなあ。

頬を搔いて、鯛様へどう答えたものかと濃を働かせる。  
が、返す言葉を聞く前に鯛様はコチラの肩へ貼り付き、

『まー、僕は嫌いじゃないがのう。そういう考え方』  
「……………」

どうやら考えを読まれていたらしい。  
肯定してくれる人が居るだけでも、大分楽になる。

……うん。どうせやるなら、確り腹を括って行こう。

その途中で何があったとしても、自己責任だ。  
それだけは覚悟しておこう。

『で、具体的にはどうするんじや？』

「今は、原作の何年前？」

『待て。確認する』

鯛様が空を見上げて何かと交信を開始。

あれ、もしかして本体と交信してるんだろうか。

『うむ。解ったぞい』

暫くして、鯛様がふわりと宙を一回転してコチラを向く。

『今は原作開始の6年前じや』

思わず内心で感激の声を上げる。

なんとも良いタイミングに転生してきたものだ。

だが、まだ確認しなければいけない事が残っている。

「ウエールズ、襲撃は？」

『まだの様じゃな。季節的にウエールズは今、秋の様じゃのう』

「……あまり、時間が無い」

タイミングが、ちよつと良すぎた様だ。

今からウエールズ襲撃を防ぐとかなり無理があるんじゃないかなるか。

まず、ネギを平和に過ごさせる為には幼少期のトラウマを失くす必要がある。

でなければ、父親の影を我武者羅に追いかけるのは既に明白なのだから。

……しかし、幾らタイミングが良くつても大き過ぎる問題だな、これ

なにせよ自分の現在地が悪すぎる。

……魔法世界からじゃ、移動手段が限られてるよな。

ゲートとかゲートとかゲートとか。

主要な都市にしか無いとか、交通が不便過ぎる……。

いや、そもそも魔法世界の住人の殆どは使わないんだろうけど。

「ゲート、使える、かな？」

『無理じゃないかのう……少なくとも資金が必要じゃぞい。あと身』

分証明証もな』

「……………ない」

『ふむ。現実世界へ行く手段がない訳でもないぞい？』

「!?!?」

目を見開いて鯛様へ視線を向ける。

『フッフッフ、驚くでないわ。儂、神様じゃぞ？』

ドヤア……………とばかりに胸を張る鯛様。

良いから情報早よ下さい。

『つれないのう……………まあ良いわい。その手段とはのう』

「とは……………?」

『黒い玉のパワーを使って、無理矢理その場にゲートを開く!』

「黒い玉持ってない」

『安心せよ!』

というか、黒い玉使って良いんだろっか。

などと半目になりながら思うが、鯛様は構わん!行こ!とばかりに飛び跳ね、

『ここから西へ数km進んだ地点に黒い玉の反応があるのを感知済みじゃ!』

「レーダー機能……………?」

サポート機能充実し過ぎだろう、この神様……………。

『お主、選んだ能力も欲が無いもんだったからのう。これくらいオマケじゃて』

「ありがとう」  
『うむ』

喋りながら歩いて、川へと向かう。

「とりあえず、腹ごしらえ」

『焼きキノコ！焼きキノコ！』

「……………」

「アンタも食べるんかい。」

S i d e : : ? ? ? ?

1本のタバコを口に加えながら、僕は眼前の残骸を見つめていた。その残骸は、元は白いカプセルだった。

「僕達が数年前に」とある組織”の研究所から救い出した少女のベツドとなっていた筈のそれは今は見るも無残な姿と化していた。

無理矢理内側から破壊されたせいか、外殻が歪んだり、割れたりしていた。

しかも所々から液体が漏れたり、火花が上がったりまでしている。一体どれだけの力で扉を殴ったら、こんな壊れ方をするのだろうか……………」

「本当に、すみません……………」

「いや、君だけのせいではないさ」

灰色のスーツの形を整えながら、背後から聞こえた声に振り返る。そこにいるのは、頭に1対の角を生やした金髪の女性だ。

スーツの上に白衣を着た彼女　プリオラは深々と頭を下げていた。

それに対して僕は手を小さく振り、頭を上げるのを促すと、

「プリオラ君。彼女が居なくなつた時の状況を詳しく教えてくれ」

「はい……と言っても私も、未だに良く解っていない……」

「解っていない？」

「ええ、本当になんの前触れも無く飛び出していったんです」

「……本当に何も無かつたのかい？何かに操られている様子は？」

「いえ、終始楽しそうな表情で……」

彼女の発言と同時に、後ろで機材を片付けていた緑髪の研究員がこける。

確かに、液体が垂れ流しになっているせいで滑りやすくなってるしなあ。

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫ですっ！ええ、大丈夫ですとも！」

声をかけると彼女は慌てて立ち上がり、頭を下げて部屋を出て行った。

なんで主任がおかしくなつたア　！とか悲鳴を上げてたのだからうか。

「……元気だね」

「ええ、昨日から特に」

やっぱりあの子が起きたのが嬉しかったんじゃないか、と彼女は



微笑む。

が、それも一瞬ですぐに眉尻を下げた表情になり、

「あの、あの子の行先とかはもう解ったのでしょうか……？」

「ああ、向かった方角は解ったんだけどね……」

「本当ですか!？」

「この研究所周りの捕縛用の罠が幾つか起動していてその軌跡から方がうオ!？」

……ネクタイが引つ張　　って、怖ッ!？プリオラ君の眼が光って、怖ッ!？

「罠が起動してたって何があつたんですか!？というかこの研究所の周辺の罠は”危険度が高い侵入者にしか発動しない”っていう話じゃなかったんですかまさか業者が不良品送ってきてたんですか!？あの野郎どももしあの子に怪我とかさせていたらハッキングしてデータを全て『ドキッ!男だらけの青春!暑苦しい目眩めく一幕!』に置き換えてやる……!しかも全部映像データの顔部分を貴方に置き換えた上でよ!？」

「僕まで被害者予定リストに含まれてる!？」

「ちよつと顔の写真ブリーズ!あ、悶えた感じのヤツとかあるとベネね!？」

「その話聞いた後で提供すると思ってるのかい!？」

暫しの取っ組み合い。

僕、WIN。

「と、兎に角彼女の向かつてる方向は解ったから後は僕達に任せておくんだ」

「ぜえ……わ、解りました。でも、何か進展があつたら……」

「ああ、勿論連絡するとも。僕もこれから捜索に向かうしね」

「え？貴方まで、ですか？」

「こう、冷静に見せようと頑張ってるけど。内心、彼女が心配で溜まらなくてね」

頭を掻きながら、苦笑を浮かべてしまう。

「そう、ですか………すみません。気を遣わせてしまつて」

「いや、君と話していると僕も幾分か落ち着いてくるよ」

「む。私の慌てっぷり、そこまで酷かったですか………？」

「違う違う。そういう訳じゃないさ」

手に持った煙草の火を携帯用灰皿へ突っ込んで消し、

「あの子をここまで心配してくれる人が居て、安心出来るから、かな」

その言葉を最後に僕 高畑・T・タカミチは出口へ向けて歩き出した。

Side: 転生者 A

「何か、渋い兄さんに心配された気が」

『お主は一体何を言っているんじゃない』

走るー奔るー俺ーたーちー

鼻歌混じりに無表情な影が山を行く。

山と言っても見渡す限り岩、岩、岩。

見事なまでの岩山だ。

癒し要素の緑の欠片もあつたもんじゃない。

「こつち?」

『うむ。向こう側じゃな』

肩の上で鯛様が手の部分に当たる鱗を動かし、岩山の頂上を指差す。

『頂上の向こう側にある様じゃのう』

「随分、変な所に置いてある」

か。神様の力の結晶なんてもの、こんなところに落ちてて良いんだろうか。

『なあに、黒い玉は転生者以外から見たらただの水晶じゃしな』

「無害?」

『うむ。ちなみに黒い玉の力を使える事なんて滅多にないんじゃない?』

「選ばれし者……!」

『確かに今のところお主1人じゃし、選ばれし者じゃの』

「えっ」

『お主1人』

「なにそれこわい」

言いながら頂上に到達。

辺りを見渡しつつも、話を続ける為に鯛様を見る。

「どうして、私1人？」

『お主、能力は要らぬと言ったじゃろう？』  
「言った」

でもその代わりに基盤の強化や成長のリミッター解除をして貰った筈だ。

『戦闘面ならそれだけで良いんじゃないが、他の部分のう』

「あー……」

『戦うだけではどうしようもない事もあるっ？』

鯛様は片手を上げ、ウインクを1つ。

『ま。これは儂からのサービスじゃ。勿論使用には儂の許可が必要じゃぞ？』

「ん。勿論」

神様の力なんて自由に使える様になったら、どうなるか解ったものではない。

一時の感情に左右されて世界が破滅、なんて事になりかねん。

「そういえば、他の転生者も居るの？」

『この世界にも既に十数人程おるのう』

「十数人……」

結構多いんだな。

『まあ、邪な考えを持っている者は転生前に脱落しておるし、安心して良いぞ？』

「変な人は、居ない？」

「いや、変人はいつぱいおるのう……」

うん。そういう人達とはあまり関わらないでおこう。  
思考を切り替え、周囲を見渡しながら目を細める。  
目に意識を集中させ探索を行う。  
結果はすぐに出た。

「見つけた」  
『早いのだ』

足場になっていた岩から飛び降り、一直線に岩山に根を下ろす1本の樹の下へ向かう。

トンと踵で音を立て樹の目の前で急停止。  
うーむ、この身体の使い方にもだいぶ慣れてきた。  
まだ1日しか経っていないのに違和感もないし。

……ただなあ……。

プリーツスカートのをヒラリと捲り上げる。

『ウオオオオオオオオオ！？いきなり何をしてるんじゃないかありがとう  
御座います　！』

鯛様やかましい。

……違和感感じないのもどうなのかなあ。

女になったというのに違和感の欠片も無いのは、元男としてどうなのだろうか。

まあ今そんな事を考えていても仕方あるまい。

膝を折り、視線を下げればそこにあるのは禍々しいオーラを放つ  
円球状の物体。

黒い玉だ。

「本当に落ちてる……」

『これは生まれたばかりの玉の様じゃな。運が良いのう、お主』  
「うん」

頷きと共に玉を拾い上げ、

「んっ……!?!」

こそばゆい感覚に片目を閉じると同時に黒い玉が自身の身と同色の  
光を放ち始めた。

何事かと思うが、瞬間、光は私の身体へと塗りこまれる様に溶け  
ていった。

『そのまま状態だと運ぶのに不便じゃろ？手の甲を見てみると良い  
ぞ』

「おお……」

見れば、赤い紋様が手の甲に浮かび出る。

中央に一本の両刃剣。

その左右に広げた翼を象ったが如き紋様だ。

なんだこれ格好良い。

『更に集めるとドンドンその紋様もパワーアップしていくぞい』  
「ほおお……」

無表情ながらも目を輝かせる。

これは良い。凄く、良い。

「いっぱい、集めよう」

せっかくだし、腕いっぱいになるくらいまで。

『いや、それはどうなんじゃ……?』

だって格好良いだろう!?

樹の上に登り、世界を見渡す。

山の頂上という事もあり、見渡せる風景は実に広大だ。

そして、視界の遥か彼方には、

「大きな、街がある……」

『あれはこの世界の首都メガロメセンブリアじゃな』

「メガロ、メセンブリア……」

よし。決めた。

『ん?どうした?すぐにゲートを開かんのか?』

「秋だというなら、まだ少しだけ、ほんの少しだけ、時間がある」

『まあ、儂の見立てじゃと、ウェールズに雪が降るまで後1ヶ月程度は余裕があるのう』

十分だ。

もし会えなかったら会えなかったですぐに現実世界に向かえば良い。

そうと解れば、計画を考えるのも楽だった。

「メガロなら、もしかして、あの人が居るかも」

「あの人？」

「うん。会えない確率の方が、高そうだけど」

頷きながら片手を樹の幹へ添え、視線に込める力を強めて首都を見つめる。

「クルト、ゲーデル。あの人なら、力になって、くれる」

かも、と付け足すと同時に私は豆粒の様であった街へ向かって駆け出した。

しかし、この辺り獣とか全く見かけないなあ。



### 第3話 指針決定！そして新たな力！？（後書き）

ほぼ説明回という……！

原作キャラもちょっとだけ出て来ましたが、まだまだ若々しい高畑さんです。

次辺り戦闘が入る予定ですっ。

クルトさんも、出せたらいいなあ。

以下、オリキャラーズのイメージ画像です。

> i 3 6 1 1 0 — 4 5 1 4 <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9696y/>

---

ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穏なる世界！～

2011年11月30日00時56分発行